

図書紹介

◎コモンズの思想を求めて —カリマンタンの森で考える— 井上 真著
B6版 162頁 岩波書店 2004年 1,700円+税

インドネシアというフィールドをずっと追ってきた著者だからこそ描ける具体的な描写が溢れており、それでいながら事例研究だけに止まることなく、そこからタイトルへと思想の抽象化、発展を試みており、意欲作と言える。地域による差異の大きさにともすると圧倒されてしまいがちだが、むしろそれだからこそ、中途半端に終わることなく、徹底的に迫っていくという著者の姿勢には頭が下がる。熱帯のある国・地域で起こっていることが日本へ世界へ普遍的なものにまで発展・昇華しようとしている息吹を感じずにはいられない。

序章「身近なコモンズ」では、ふとした身近な日常の事柄の中に含まれるコモンズのあらわれ方を例に出しながら導入を試みている。第一章「熱帯林で何が起こってきたのか」では著者のフィールドである熱帯の森林において過去から現在までの間に起こってきた事柄について、一般的な誤解を解きつつ、複眼的な視点から客観的に事象を捉えることの大切さが表現されている。また、次章以降の準備段階として適宜用語の定義・説明が挿入され、専門でない人にとっても、いわゆる、「熱帯林問題」についてのイメージが十分共有されるはずである。第二章「コモンズ概念とその有効性」から本論に入っていくが、「利用・管理」へと焦点を絞りつつ、現地での森林利用の合意事項について具体例を挙げ紹介している。引用とはいえ、想像以上に詳細かつ具体的なきまりがあることに驚かされる。また後半では、アクセスの困難な奥地にあるコモンズでも外部社会の影響を免れなくなっている現実を直視することを迫っている。第三章「揺れるローカル・コモンズ」では、外部からの圧力について地域住民の側でも黙って見ていた訳ではなく、地方から、そこに生活する地域住民の側から生まれた、戸惑いからの模索を提示している。第四章「コモンズの思想への旅」では、ワーキンググループの事例から発展させ、さまざまな主体が協働して資源管理を行なう「協治」を定義し、この「協治」が「開かれた地元主義」によって現実味を帯びてきている現実と、「かかわり主義」によって多くの主体を含みながら「育てていく」ことができるのではないかと、という可能性に言及している。最後の部分で述べてあった「地域住民」と「都市住民」をつないでいくことができる可能性について今後具体的な動きとなっていくことを楽しみにすると共に、読者には当書籍で貫かれている複眼的な視点を忘れることなくどんどん「かかわって」いって欲しいものである。 (古家直行)